# 5歳児のオルガニート・アンサンブル指導に関する試案

阪　田　順　子

# How to Suggest Organito Emsemble for 5 Years Children

Junko SAKATA

**要　旨**

5歳児の楽器アンサンブル指導の一助を提案する。楽器習得のプロセスは手間暇の苦労を伴い、最終目的地が子どもに見えぬまま、教える側教わる側相互が多少の我慢を経て達成するものである。まず音楽ありきを念頭に、実際の実音アンサンブルを経験させた後に音楽的ヴィジョンを持った上で、それが取り組めたらどれほどかよいであろう。それを実現できるのがオルガニートである。子どもは実際の音を奏で、何重ものアンサンブルをいとも簡単に実現でき、他の楽器に移して演奏する場合でも、具体的な道筋が開けることにより音楽性も短縮して確保できる。その指導法への試案を述べたものである。

**キーワード：**オルガニート、5歳児教育、アンサンブル指導、音楽教育

## Ⅰ．問題の所在

楽器の習得には時間がかかる。一見単純そうなものでも、扱い方から始めて初歩、中級へと進むためには教える側、教わる側双方の我慢強いプロセスが横たわる。相手の年齢が低いほど言葉の選び方にも注意が要り、能力を考えれば千差万別の選択をしなければならない。人数によりそれは更に複雑を極める。

本稿ではオルガニートを用いることで、演奏を先取りし、子どもが実際に生の音楽を聞きながら操作することで、演奏のシミュレーションの場を作ることを提案したい。

5歳児を対象としたのは、まず充分にこのアンサンブル計画[i]に足る年齢だと考えられるため、本研究の出発点の基盤が確実に確保できると考えたからである。保育経歴50余年の高橋保子氏の「自制する力（場の判断・話を聞く注意力・仲間と遊ぶ協調性・工夫する思考力）」が5歳児の発達の特徴であり、知能と心の発達（探究心・研究心も見えてくる）や、言葉とコミュニケーション（相手の気持ちも感じ取れるようになる）、更には知的好奇心（生活を理解しようとする）、生活力（身辺作業の自立、自制力）も生まれ始める、という心強い示唆があるためである。[1]

---

ⅰ：ここでいうアンサンブル計画とは、4声部からなる楽曲を1声部から順に増やして最終的に4声部で合奏するプロシージャを総した筆者の研究計画を指すものである。アンサンブルとは一般に合奏を指す語である。本論ではオルガニート合奏とは言わず、オルガニート・アンサンブルなる語を用いた。オルガニート・アンサンブルとは、本論においてはオルガニートを複数台使った合奏を指すが、広義では他楽器との合奏の可能性も含むものである。

また仲野悦子氏の[2]「表現の音楽に関する項目の新旧比較における、子どもの音楽的な発達の中の「運動機能がますます伸び、言葉による共通のイメージを持つこと、遊びを発展させる力、自分なりに考え批判する力が生まれる」との研究成果にも同調するものである。

さらに付け加えれば諸井三郎、酒田冨治共著『保育のための音楽教育』(1958初版）は本分野の古典的著作であるが、特に注目すべきは「楽譜以前の音楽生活」[3] なる語であろう。このくだりで著者は、楽譜以前の音楽生活に当たるのが幼稚園保育園時代で、その時期に高められる音楽的能力の重要性を説いている。それは表現能力と感受能力で、前者は歌う、弾く、おどる、リズム楽器を打つ等であり、後者は①音高感、②リズム感、③和音感、④強弱感、⑤速度感、⑥音色感、⑦音楽的把握力、⑧音楽的記憶力等の総合されたもの、という。このうち、①音高感、③和音感、⑤速度感、⑥音色感がオルガニート・アンサンブルにより簡単に身につくと筆者は考える。

もともと筆者はこの試みは４歳児から十分可能であると考えている。その根拠として過去１０年間に３度実施した本学保育研究会大会内での親子教室（３歳児以上対象）で行った「オルガニートに挑戦」において、３歳児は保護者の助けにより１分間のハンドル回しができ、自力では約30秒で集中力及び腕の力が続かなくなる傾向があった。４歳児はほぼ１分間を難なく回せた。５，６歳児は保護者が助けなくても十分回しきれた。これらの経験から４歳児から十分可能だと判断したものである。(平成16，18，20年実施のオルガニート親子教室は研究目的でなく、平成２８年に本稿を書く事は全く想定していなかったため筆者の記憶に頼るのみである。)

足元固めの意味からも、子どもの一般的能力の標準値から余裕を持たせて、提案の第一歩を踏み出すため、５歳児対象とすることにしたわけである。論拠として高橋保子氏の「４歳児の発達の特徴は、心身ともにダイナミックな発達をみせ、幼児らしくなり、発音の不明瞭さは残るが語彙は増え、個人差はあるが身辺の作業が可能になる。」[4] をあげる。つまり、オルガニートのハンドル回しにはある程度の体力が必要であるが、それに必要な身体の発達が４歳で獲得できるからである。１分間回しきるには更に集中力も必要であり、高橋のいう、心身の発達により身辺作業がオルガニートの扱いに合致するわけである。

本論では以上の理由により、５歳児を対象としたオルガニート・アンサンブル指導への方法を提示するものである。

## Ⅱ．研究方法

最大４つのパートを使い、それらの何種類かの組み合わせにより、５歳児が音楽の異なった層を体得し、心地よさと作り出される音響を実感することを第一歩とする。

また今回は、５歳児によく知られた教材を選ぶこととする。既知の歌を自分が現実に奏でているのだ、という実感を得るのがまずは肝要である。基礎固めはゆっくり丁寧に行い、無理なく進むことを指導の根本理念に置くものとする。

（１）事前準備：オルガニート奏に必要なものＡ、Ｂ、Ｃ

Ａ．オルガニート本体

鋼鉄製、縦７×横11×厚み３㎝、350ｇ（以後本文中、本体とする）

写真１の１：正面，写真１の２：背面，写真１の３：側面

Ｂ．作曲カード

厚紙製、縦７×横53㎝、９ｇ（以後、カードとする）

写真２の１：カードの左半分、写真２の２：既製品の拡大，写真２の３：文字記入版

C．穴あけパンチ：

ステンレス製、縦２×横12×厚み1.7㎝、40ｇ（以後、パンチとする）

**写真１の１：正面**　**写真１の２：背面**　**写真１の３：側面**

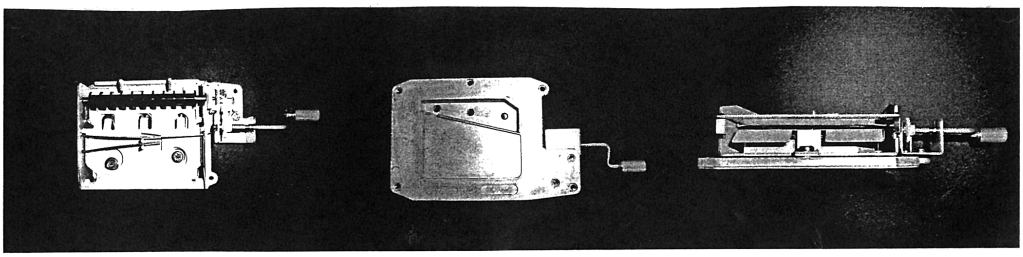
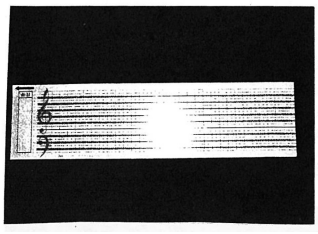
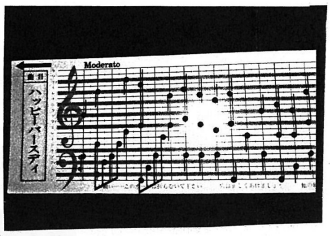


**写真２の１：カードの左半分**　**写真２の２：既製品**　**写真２の３：文字作品**





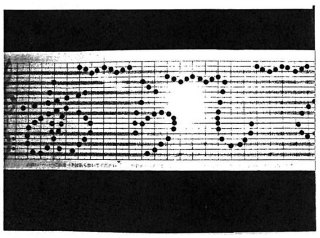
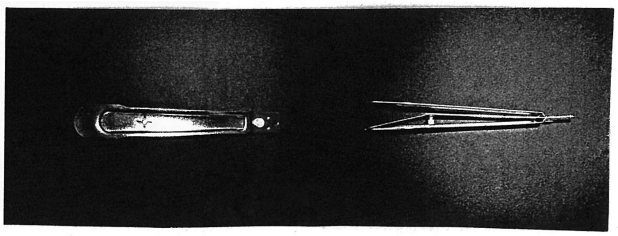



**写真３の１：正面**　**写真３の２：側面**



このうち子どもが使うのはA．本体とB．カードである。いずれも頑丈なものではないので、扱い方は奏する前に丁寧に説明し、精密機械であることを特に強調するのがよい。このことは今後子どもが種々の高度な誂えの楽器を扱うことの可能性を見越して、先取り学習の一助となるであろう。大げさに聞こえるかもしれないが、将来的にあらゆる分野の物品の扱いに応用のきく大切な教育を先取りすることにもなる。

５歳児がカードを作成することは可能であると思われるが、それについてはまた別の研究とする。この度は必要なものはすべて、教える側が準備する。

このカードが五線譜と異なる点は、２オクターブ半（ハ－２点イの20音）に限られ、近代鍵盤楽器でいうところの白鍵のみに限定されることである。黒鍵部にあたるものは予め設定されていない。見易いように白とピンクで交互に色分けしてあり、カードの両端に小さい文字でドレミが記入されている。作業半ば（カードの真ん中寄り）はドレミの確認がしにくいため、予め中心部にドレミを書き足すと効率的である。約10×50センチの厚紙で、M.M.四分音符＝60ならば約１分の曲が記入できる。

今回はディズニーの『小さな世界 *It's a Small World*』を教材とする。手順は以下のとおりである。

ⅰ．２分の２拍子で16小節の楽曲なので、先に４目盛りずつ鉛筆で区切って縦線を入れておく。これはしるし打ちの時にズレを防止するためである。あとで気付いた時など、一音のズレの修正は大変煩わしく非効率であり、かといって修正しないままアンサンブルすると大きなマイナスが生じる。

ⅱ．楽譜を書くように柔らかめの鉛筆で、縦線と横線の交叉するところに印をつけていく。直径１～２ミリの小さな○印がよいと思う。

ⅲ．横のひと目盛を四分音符ひとつとする。八分音符は点線で仕切られている半目盛（４ミリ）に相当する。十六分音符はさらにその半分、つまり２ミリ相当にあたる。

ⅳ．同音の八分音符が連続する場合は、後の方を１オクターブ上か下に移すことが求められる。本オルガニートの性能では、同音はひと目盛以上空けないと機械が音を拾えず、穴をあけても音は出ず意味がないからである。四分音符の連続は全く問題ない。

ⅴ．五線譜のように符尾、符鈎をつけると、出来上がりが五線譜に準じて見易いが、はじめの段階では必要はないであろう。（既製品には、みなそれらがついているので、五線譜のように見え、曲のイメージがわきやすいことも事実である。）

ⅵ．下書きを終えたら再確認をすること。一度開けた穴は元に戻らないので、十分に正確であると確認してから穴をあけることが大切となる。（応急処置として倍音列に則り必要な音が浮き出る、または失敗で開けてしまった穴の音の響きを薄める試みも理論上は可能であるが、高度な音楽学の知識を必要とするためあまりおすすめしない。）
穴を埋めるためにセロテープや紙などで補習することは、機械を痛めることになるのでしてはいけない。

ⅶ．穴あけは丁寧に行う。一音一音心を込めて、パンチの中心と開けるべき縦線横線の交叉点を正確に合わせて空けていく。油断すると穴の周りに紙の繊維の細かいほつれがでることがあるが、音に影響を及ぼす恐れがあるのでゆっくり丁寧を心がける。（乱暴な穴あけによりズレがでればでるほど、アンサンブルに微妙な歪みの可能性がうまれてよくない。はじめにパンチの表裏を確かめることが肝要である。）

（２）５歳児への丁寧な説明

①機器の説明

精密機械の全体的な扱いについては、前述したとおりである。次に、奏するときの注意点は、本体を見せながら説明する。左手で本体を押さえ、右手でハンドルを回す。回す方向は奏者の正面に向かって右手による時計回りである。（ハンドルを持つ前に一度右手で時計回りの真似をするとよい練習になると思う。反対に回すとカリカリと違和感のある音が聞こえ、当然機械にはよくない。）

本体を押さえる左手がカードの進行を妨げないようにするため、先に両手で大きなおにぎりを持つ想像をしてみるのも良いであろう。

カードは奏者の手前から差し込むが、器械によってはそっと差し込むだけでは最初の音を器械が掴んでくれない時がある。すると何度回してもカードが動かず、音もでない。ややカードを押し気味にしてやるとスムースに進行する。この手応えを覚えることも必要なひと手間である。この力加減で最初に20個の音が軽くヒャンヒャンと響くことがあるが、演奏準備の音と認識させる

ことも大事であろう。

②演奏の仕方と環境づくり

カードを回しきるのに約1分かかる。1分は初めての者にはやや長く感じられる時間であろう。また1分右腕を回し続けるというのはかなりの運動量でもある。始める前に上体をほぐしリラックスすること。最終音が鳴った後に少し無音状態ができる。そこで慌ててカードを本体から引き抜くことのないように注意させる。器械内部を傷めないために大切なことである。

カードが本体から完全に離れるまでの時間は、5歳児にはやや長いかも知れない。あらかじめよく伝えることである。

③滑り止めの使用

右手でハンドルを回し、左手で本体を固定するが、のせる台の材質によっては安定性が不足する場合がある。滑り止めになるような材質（ゴム状の薄い布が適している）のものを下に敷くと演奏に余分な気遣いが要らないので推奨する。台の表面がザラザラして滑りにくい場合は特に必要ない。

④ハンドル回りの空間の確保

立って奏する場合が多いと想像するが、机等を使う場合、本体の右が空間になっていることが必要とされる。ハンドルを回すのに必要だからである。長いテーブル状の台上に横並びでアンサンブルをする場合、その空間を作るのには配慮が要る。4奏者のために4台の机があるのが理想的であるが、難しいならば長い机の周りに奏者が並ぶ形をとるのも一法であろう。4奏者が横一列に揃って正面を向いた状態で演奏したいのであれば、各オルガニートの下に右手が机に当たらない程度の台、箱等を置けばよい。

⑤箱状の台

さらに良い音で聴きたい場合は、箱状の机ならなお良い。大きさ、形状により異なった共鳴の効果でよりよい音響が得られる。

もう一段深く、共鳴の音響体験を実感させたい場合は、共鳴箱状の中に頭を入れて響きの渦を直接体験させるのが理想的である。出来うれば体全体がすっぽり入る大きさの共鳴箱が理想的である。小さなオルガニートがこんなにも広がりのあるサウンドとなる不思議に子どもは狂喜乱舞するのではないだろうか。音響教育に関してはまた別の研究の希望が考えられる。

（3）演奏

5つの譜例は上段より

譜例1．オブリガート
譜例2．主旋律
譜例3．伴奏
譜例4．アルペッジョ
譜例5．総譜

である。

譜例1．は筆者編曲によるオブリガート譜である。詳細は各部分譜を参照されたい。

譜例2．は『小さな世界』の主旋律でオリジナル曲はト長調であるが、ここではハ長調へ移調し、かつオルガニートの特性に合わせ筆者が編曲した。オリジナル曲はリチャード＆ロバート・シャーマン作詞作曲による著名なディズニーの名曲（Copyright1963）である。

譜例3．は譜例2．と同様にオリジナル譜から移調し、音響面で最も綺麗に響く編曲を施した。

一般的な伴奏譜は鍵盤楽器を左手で奏することが目的であるから、無理のない自然な人間の運指が基になっている。オルガニートではその気遣いが不要であるので音使いを所々変えてある。
譜例４．はオルガニートの真骨頂とも言える特性である、一瞬にして２オクターブのスケールが正確にいとも容易く演奏できる部分である。各段に異なるスケールを挿入できるわけであるが、今回は最低限にとどめた。

演奏にあたり、４体のオルガニートをどのように配置するか。これは工夫によっていろいろ考えられる。ここでは演奏を聞いている他の子どもたちにとって一番音楽がわかりやすい配置がよかろうと思われる。よって今回は聞き手が受け入れやすい基本的な配置を提案する。

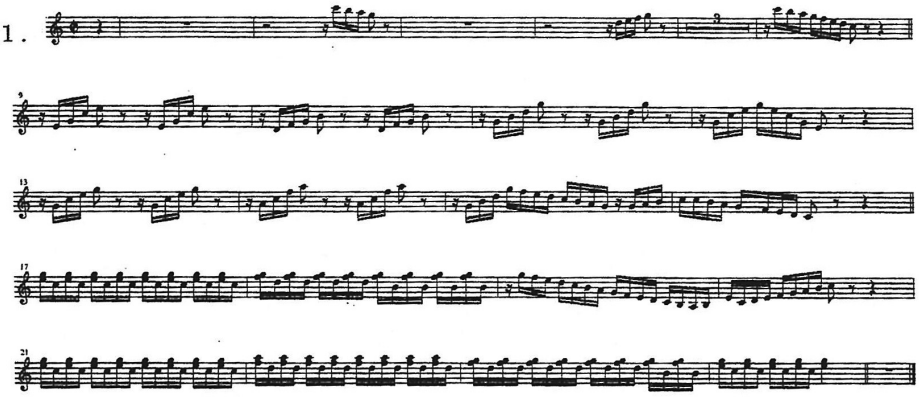
左より右へ、(数字は譜例の数字と同じものである。)

４．アルペッジョ、　３．伴奏、　２．主旋律、　１．オブリガート

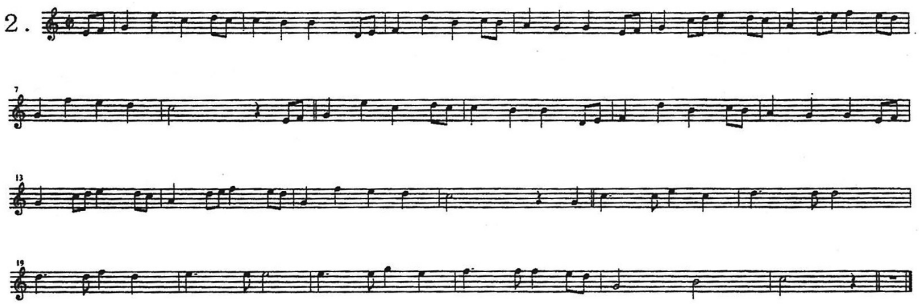
と並ぶのがよいと思う。

次に１～４の担当を決める。決め方もいろいろありそうだがここでは特に指示しない。オーケストラのように各パートを複数の奏者が受け持っても、揃える難しさはあろうが、さらに別の味わいも生まれよう。が、まずは４奏者で試みること。

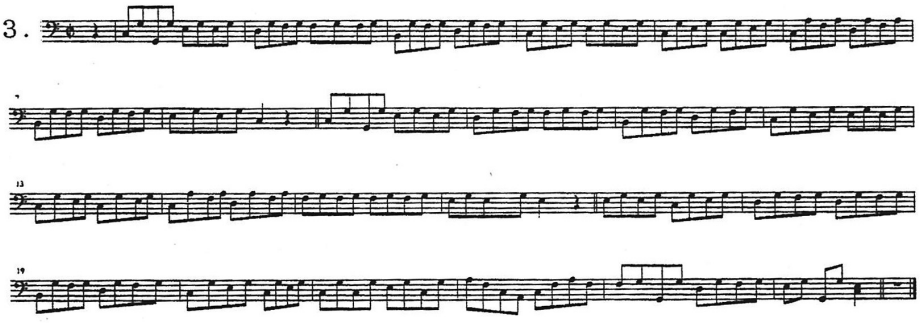
**譜例１．**



**譜例２．**

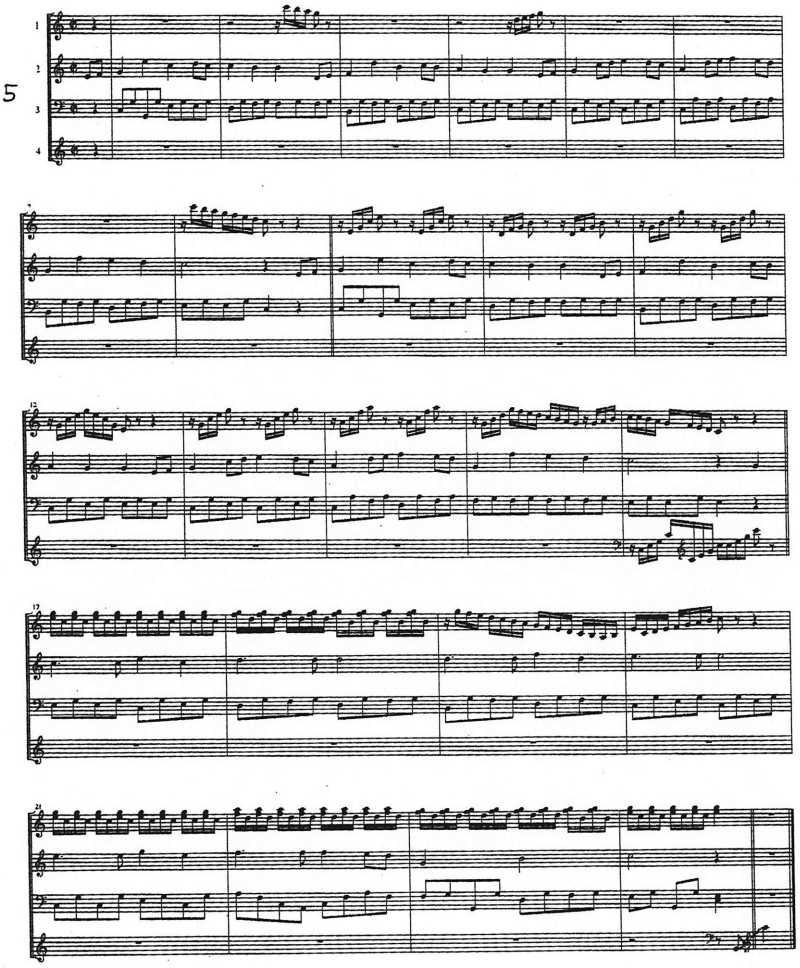


譜例３．



譜例４．

譜例５



・2のみ演奏する：みんなで耳を澄ませて聞く。
・3のみ演奏する：みんなで耳を澄ませて聞く。
・2＋3を合わせて聞いてみる：音の層の厚み、広がりが感じられたかを確認する。
子どもの反応を大切にし、必要によってはもう一度聞いたり、時間に余裕があれば再度2と3を別々に聞いてみる。このとき演奏者は替えて、なるべく多くの子どもに体験をさせるのが理想的である。
・3のみ聞く。
・2＋3＋1を聞いてみる：子どもの反応を大切にし、時間的に余裕があれば上記と同様にすると良い。噛み締めるように耳を澄ませてもらう。ボックス内に入って（頭だけでも入れて）聞くとさらに良い。
・2のみ聞く。
「こういうのが入るとどうなるでしょう？」と問いかけながら4のみ聞く。殆どが休符で待ち時間が長いので、子どもの反応は様々であろうが、5歳児の集中力の限界を考慮に入れ1回のみの試みとするのが無難であろう。
・2＋3＋4を聞く
子どもの反応を見ながら、「どれか一つ、もう一回聴きたい？」など問うてから最終的に2＋3＋1＋4と全員で合奏する。（大拍手）

ここで留意すべきは奏するテンポであろう。すべて生演奏であるので、周りの奏者を聞き合い、自分だけ独走しないようにすることはかなりの協調性を要することである。

演奏を聞くだけの子どもも間接的に参加していることとなり、その場にいる全員が教師の決めたテンポを基準にして進めていくことに集中していくと思われる。腕の動きひとつにも音楽のテンポが反映する、という臨場感を知ることは重要で楽しいことでもある。

さらに指揮者を作り、それに合わせて皆がテンポを合わせて行くということもできる。

演奏を統合することは難しさもあるが、まとめることの喜びはひとしおであろうし、連帯感も生まれる。指揮棒を用意し、新しい経験をさせることにも繋がっていくがこれはまた次の研究テーマとする。（テンポを大きく動かすことの難しさとともに、思い通りになった時の喜びはさらに大きいであろうし、子どもの可能性を開拓する一助となることは間違いない。）

1～4の組み合わせは複数あり（数学的には15パターン）並ばせ方等奏者の配置も複数考えられる。円形で囲んでも良い。円内に入って音響の渦を体験することも重要である。指導する者のセンスにより何を子どもに聞かせたいかで選択し、クリエイトできる可能性も高い。

## Ⅳ．研究結果

今回の曲は、わかり易さのために平易でプリミティブな選曲とした。これを通過すればあとはどのような曲も教材とすることができる。ただクロマチックは出来ないのでディアトニック、ハ長調が基本となる。イ短調でも旋律的や和声的は難しいので曲選びに限界はあるが、高度な倍音操作によりどうしても出したい音をまやかしの近似値で出すことは可能である。次の課題としたい。

他調の曲ならばハ長調に移せば良いだけである。またこれまでカードに図形を書き、音のある箇所を拾って曲にすることもした。これは読譜を習得していない子どもにも応用できることから3，4歳児にもオルガニートが親しめる第一歩になっている。オルガニート独自の音響特性から、どのような無軌道な穴あけをしても、それなりの様になるサウンドが生まれることは強みである。

今回はあらかじめ教師が用意したカードを使ったが、5歳児ならばカードに曲を書き、穴あけをすることもできると考える。

## Ⅴ．考察

以上のように今回提案したいのは、子どもにとって非常に手っ取り早い音楽性の習得である。

一般的に音読みから始め、手指に音を覚えさせ、何度も肉体記憶の作業を重ねてはじめて曲を奏する、というのが音楽習得の常識であるところを、中間のプロセスを経ずにいきなり完成した楽曲の1パートを音にでき、味わうことが出来る、ということがオルガニートならば可能であるからだ。先のプロセス中に子どもは集中力を切らしがちであり、完成までの長い道のりに絶望さえ感じて音楽そのものを嫌うようになるとも限らない。大変危険なことである。そのような苦労をせず、まず完成曲を味わうことが出来るものは、筆者の知る限りオルガニートただひとつである。

つまり、準備さえすればどんな高度な曲も（ハ長調、イ短調、1分間、2オクターブ半という限界はあるが）4部合奏のみならず、より多数の合奏において可能である。

. 最後に、音楽教育の理論家で実践家でもあるフランセス・アロノフの「一つの教育法に固執すべきではない」「常に新しいアプローチを探求し続けよ」「Anti-methods（反教育法）で音楽教育を目指す者にチャレンジを与え続ける」[5] に勇気をもらって本稿に至ったことを付記する。

アロノフ曰く、有能な教師は、音楽教育についての本格的で緻密な基礎理論に立脚して、教材や方法を自由に選択できる人のことである、という。またハワード・ガードナーの多面的能力の理論 Theory of Multiple Intelligences に注目した音楽教育の論文を複数発表している。
このようなより新しい研究成果を次々取り入れる学究姿勢を後人として見習いたい。1988年の来日時に行われた講習会は、「単純なきっかけを使って徐々に高度な音楽的方向へ導き、即興性と楽しさを兼ね備えた素晴らしさだった」という。[6]

幼児に音楽の美しさと楽しさを味わせつつ、音楽的活動を発展させていくことは、我々の理想である。そのための循環したレベルアップ（良い幼児音楽教育のためには保育者養成のための良い音楽教育が必要であり、保育者レベルに良い音楽教育が可能になるためには、幼児期からの良い教育が必要だ、とはまさに我々保育者養成に関わる者にとって心震わす名言である。[7]

筆者は本研究が「感性の教育」の重大性[8]を喚起し、「作品、楽譜、発声法という文化の中の定型化された部分を子どもの「内なるもの」と無関係に取り上げることなく、記号を通した文化の接触による感性の惰性化、習慣化を避けること[9]への警鐘につながっていけば理想的だと考えている。

また、音構造が単純で普遍的な「わらべうた」[10] を使うことも、オルガニート活用には最適であり、保育者養成の音楽科目にもこれらを散りばめようと考えている。

本研究を始めるにあたって学んだ先輩諸氏の掲げられた人間教育・全人教育の理想である「美的体験への前提、人間関係の暖かさ、情操への前提」[11] を一歩でも進めていきたい。

## Ⅵ．課題

準備する曲作りの質的向上は別にして、次に目指すはカード自体を子どもが作っていける指導法である。3歳児対象の方法論、4歳児対象のさらに進んだ指導法、5歳児対象のかなり高度な可能性を一つ一つ進めていくことである。器械は使いようなので、さらに新しい可能性を探っていきたい。

**引用文献：**

1 高橋保子：３・４・５歳児の指導計画,教育出版，東京，pp. 6 - 7，2007（2012第４版）
2 谷田貝公昭監：音楽表現－新・保育内容シリーズ５，一藝社,東京，p.31 l. 1 -14,2010
3 諸井三郎,酒田冨次：保育のための音楽教育，玄真社，東京，pp.162-165,1958（1975第８版）
4 高橋保子：３・４・５歳児の指導計画，教育出版，東京，pp. 4 - 5，2007（2012第４版）
5 F.W.アロノフ，畑玲子訳：*Music and Young Children*，幼児と音楽，音楽之友社，東京 pp.243-245,1990
6 前掲アロノフ、p.245
7 前掲アロノフ、p.245,l. 5 -10
8 小島律子，沢田篤子：音楽による表現の教育，晃洋書房，京都，pp.15-16,1998
9 前掲小島、沢田、p.16,l. 9 -16
10 前掲小島、沢田、pp.146-150
11 前掲小島、沢田、pp.154-157

**参考文献：**

１）日野原重明，湯川れい子：音楽力，海竜社，東京，2004
２）久保田慶一：音楽の文章セミナー，音楽之友社，東京，2006
３）小島律子，澤田篤子：音楽による表現の教育，晃洋書房，京都，1998
４）湯川嘉津美，荒川智：幼児教育，障害児教育（論集現代日本の教育史）日本図書センター、東京、2015
５）マリオン・ゴーフ，玉川まや子訳：ダンスの教え方，学び方，玉川大学出版部，東京，1997
６）高橋保子：３・４・５歳児の指導計画，教育出版，東京，2007（2012第４版）
７）尾崎康子，古賀良彦，金子マサ，竹井史：ぬりえの不思議－心と体の発達に見るその力，ぎょうせい，東京，2010
８）C.リッテルマイヤー，遠藤孝夫訳：芸術体験の転移効果，東信堂，東京，2015
９）本間雅夫，鈴木敏朗：わらべうたによる音楽教育，自由現代社，東京，1998（2002改訂）
10）小島律子：構成活動を中心とした音楽授業の分析による児童の音楽的発達の考察，風間書房，東京，1997
11）大山美和子：幼児の音楽教育，国土社，東京，1991
12）F.W.アロノフ，畑　玲子訳：幼児と音楽，音楽之友社，東京，1990
13）小原光一，川池　聰：自己表現活動の楽しい展開プラン(音楽科授業の新展開１)，明治図書出版，東京，1990
14）ドミトリー・カバレフスキー，坪能由紀子訳：子どもの心を開く－カバレフスキーの音楽教育論，音楽之友社，東京，1989
15）神原雅之篇：世界の歌を遊ぶ－ミュージック・ゲーム67選－ボディーパーカッションから音楽表現まで，明治図書，東京，2008
16）中野正以：音楽ゲーム－あそびからの音楽保育，東京音楽書院,，東京，1979
17）仲野悦子編：感性を育む－音楽表現，みらい，岐阜，2003
18）酒田冨治：幼児の音楽教育，共同音楽出版社，東京，1976
19）諸井三郎，酒田冨治：保育のための音楽教育，玄真社，東京，1958（1975第８版）

20）谷田貝公昭監修，三森桂子編著：音楽表現（新・保育内容シリーズ５），一藝社，東京，2010
22）岩崎淳子，及川留美，粕谷旦正：教育・保育課程論－書いて学べる指導計画，萌文書林，東京，2015